

# 上毛の俳諧宗匠・矢口一多をめぐる人々

——春秋庵一門と和算家——

金 田 房 子

**要旨** 矢口一多（一七八七～一八七三）は、群馬県高崎市の八幡八幡宮の神職を務める一方で、俳諧宗匠・寺子屋宗匠として、地域の啓蒙活動に尽力した。一多は、とくに俳諧に熱心で、はじめ地元高崎を中心とする平花庵の人々と交流し、のち天保の三大家の一人である鳳朗に熱心に学ぶ。晩年は自らも俳諧宗匠として近隣の人々の指導にあたった。

一多の文化活動は、「矢口丹波記念文庫」として子孫の宅にまとまって保存されている。筆者はこれらの資料から、かつて一多の生涯を「矢口一多年譜稿―上毛八幡矢口家蔵書から―」（『国文学研究資料館紀要』39 平成25年3月）として時系列にまとめた。こうした文化的な活動の中で、具体的にどのような人々と交流したのかについては、同文庫に保存されている短冊類や書簡、月並俳諧の募句広告といった一枚物の資料を参考とすることができ、これらに記される人物を調べること、一多の活動の具体像を明らかにしてゆく。

所蔵される短冊はおよそ百枚、各々の作者を調べ、伝記のわかる二十名について、個々に紹介する。これによって見えてくるのは、主として白雄―碩布―逸淵―西馬とつながる春秋庵系の俳諧グループにつながりのある人々との交流である。また、月並俳諧の募句広告からも、一多が晩年に逸淵門の点取俳諧に参加していたことを知ることができる。

一方で、書簡には、和算家との関わりを示すものがある。これは、紹介状として書かれたもので、一多が務

めた神社に算額も残る上州の和算家岩井重遠から、江戸の和算家馬場正統に宛てたものである。馬場正統は錦江と号し、俳諧宗匠としても著名であった。

江戸時代末期の北関東における村の文化活動を明らかにする手がかりとして地方俳諧宗匠の活動に注目し研究を進めるなかで、本稿では残された資料から浮かび上がる交友関係に焦点をあてた。

キーワード…俳諧、上州、和算家

## はじめに

矢口一多（一七八七～一八七三）、名は以真、別号生々居・生々庵など。代々上州八幡八幡宮やわたはらまの二ノ禰宜を勤め、丹波正（守）を称した。一多の読みは、ただ一カ所自身の書留に「一杉」と記したものがあり（①、「いっさん」であったと考えられる。一ノ禰宜が元祿に追放されて以来不在で、長く別当の神徳寺に握られていた実権を取り戻すために、吉田家から神主の資格を取得、三ノ禰宜の富加津家とともに実力行使に出て神官の地位の復権に務めた。また、俳諧宗匠・寺子屋宗匠として、地域の啓蒙活動に尽力し、「八幡の黄門」「丹波さま」と慕われたという。

その文化的活動は、現在「矢口丹波記念文庫」として群馬県高崎市の矢口家に保管される約二千点の資料として残されている。蔵書は主に一多とその父の正喜によって形成され、写本が中心である。その写本に書写者や年月日（場合によっては開始の時刻と終了の時刻まで）几帳面に記されていることから、形成の過程を具体的に追うことが可能である点で非常に興味深い。また、主に一多に関わる俳諧点帖や、師の鳳朗から添削を受けた句稿、さらに一多が地域の門人に添削を施した句稿などから、俳諧による在村の文化活動の一端を知ることができる。

筆者は、かつて写本の書き入れや句稿などから一多の生涯を「矢口一多年譜稿―上毛八幡矢口家蔵書から―」（『国

文学研究資料館紀要』三九 平成二五年三月)として時系列にまとめた。一多は、例えば一茶などのような業俳(職業俳諧師)とは異なり、俳諧宗匠で生計をたてていたわけではない。一多に限らずこうした地方俳諧宗匠は、俳諧好きもさることながら、尊敬され、言わば名誉職として宗匠となり、その地域の文化の中心的な担い手であった。文化活動の実態を具体的に追ってゆくことが次の課題となるが、まずは本稿において一多が俳諧を通じてどのような人々と交流したのかを概観することにした。なお、一多に大きな影響を与えた鳳朗については、別に調査を進め、鳳朗自身を主人公とした報告をまとめる予定である。

### 一 高崎及び八幡の人々

前掲の拙稿において、一多の生涯をおおまかに三期に分けて概観した。一多と名乗る以前、涼風の号で点取俳諧に遊んだ第一期(文政九年(一八二六)四十歳まで)。鳳朗(鶯笠)に出会って親炙し、八幡八幡宮に芭蕉句碑を建立するに至る第二期。このとき芭蕉に「花本大明神」の神号を贈ることに成功し二条家から「花本宗匠」の地位を得た鳳朗に従って二条家御殿における俳諧連歌に連なったことは、大きな誇りであったに違いない。そして第三期は、鳳朗が没した弘化二年(一八四五・五十九歳)から明治六年(一八七三)に八十七歳で没するまでで、地域の俳諧宗匠として、専ら地域の文化活動に関わった時期である。

本節では、第一期の点取俳諧に遊んだ時期の一多の交友に目を向けてゆくことにしたい。それは、高崎や八幡など地元の人々との交流からはじまった。

一多が生まれる以前のことであるが、『矢口丹波正日記』(高崎市指定重要文化財 五二冊)天明三年(一七八三)四月七日に、

高崎九蔵貸屋雨什祝言有り。町者入乱れて家つぶす。呼れたる者四人手鎖と云。

という記述がある。雨仕の家の祝い事で呼ばれた人々が浮かれてさわぎ、借家をつぶして処罰されたというユーモラスな事件が記されている。同じ月の二十日には、「高崎一紅ヨリ巻来ル」と記されていて、女流俳人として名高かった高崎の羽鳥一紅と、一多の父正喜とに俳諧の交流があったことを知ることができる。

高崎の雨仕とは、生方雨仕（一七四〇～一八一三）のことで、鳥酔に学び、その弟子鳥明から松露庵を譲られて四世となるとともに自ら平花庵を興した。平花庵二世は高崎神宮の神官であった高井東水が継ぎ、その子心足が三世となる。矢口家には、雨仕追善『俳諧ゆきの笠』〔1482<sup>2</sup>〕（東水編・文化十一年（一八一四）刊）、東水追善『榊皿集』〔17〕（逸淵編・弘化三年（一八四六）刊）がともに所蔵されており、前者には「八幡 涼風」の句が、後者には一多の発句と付句が入集する。他に雨仕の名が見える寛政の頃の『平花庵月並句合評』〔11〕の所蔵もある。また、「涼風兄」に宛てた発句の詠草が書物にはさまれてあったが、作者無量（松月亭）は高崎の人で、『平花庵月次句合評』などに名前が見え、平花庵門人と考えられる。このように、平花庵との関わりを示す資料は多い。

一多（涼風）の俳諧は、父に従って高崎の人々との関わりからはじまったとみてよからう。

点取俳諧において、特に親しい交流が資料からうかがわれるのが、堀越可興である。享和二年（一八〇二）に可興が庵号と点印を許された時の記念集『俳諧千年調』〔729〕が矢口家に所蔵されている。これ以外にも、松声庵可興点の『天満宮額面句合』〔57〕、松声庵点『点取発句集』〔58〕など可興が点者をつとめたもの、また、可興と涼風とがともに点を競った『時雨会五十韻（応居点）』〔73〕、『点取発句』〔75〕もあり、両者が点取に興じた様うかがわれる。また、『月次句合』〔1484〕には、「上毛八幡 可興」の所書きがあって、一時期、同じ八幡の住人であったことも確認できる。

可興については、清水蓼人監修『上州の俳諧』（あかぎ出版 平成四年一月）に、

(一七五八〜一八二三) 榛名の人。本名山田庄司。俳諧は松露庵烏明に学び、逆境の中風雅に生きた。と記されているが<sup>(3)</sup>、「榛名の人」というのは何に拠ったものか不明である。伝の記述は櫻村霞道著『上毛古俳家全集』(上毛古俳人研究会 昭和二五年十月)が最も詳しいので、一部省略しつつ次に引用する。

可興は里見村の生れである。本姓山田、名は庄司、同郡(碓氷郡)八幡村堀越源左衛門の女婿となり分家したのである。彼れ幼少にして学を好み、俳諧を嗜み、師に松露庵烏明を求めた。彼れが堀越の家名をうけてより幾ばくもなく火災に罹り家運次第に傾くの頃、養父母は没し、続いて義兄田助も世を去った。喪に沈み零落に悶える彼れは風雅に救はれたのである。(中略)烏明の別号松声庵を譲りうけて判者の列に加はったのである。

(中略) A) 中官岡部某は彼れの寒渴をあはれみ、先父の功を偲ぶの余り邸内(江戸)に來たり住むを許された。(中略) 其ま、邸に仕へること二十余年、今は六十五歳と云ふ齡を迎へては眼も暗み耳も遠くなつて不便の上なく暇を乞ふて郷に歸りその年、文政六年癸未十一月三日をもつて没した。(以下略) ( ) 内は筆者

しの木弘明著『上毛文雅人名録』(私家版 平成十三年八月)は、ほぼこれを短くまとめた内容で、生地を下里見とすることがやや詳しい。

この伝記の、江戸に出て二十年余りを過ごしたという記述が正しいとすれば、可興は松声庵を継いだ享和二年(一八〇二)、時を置かず江戸に出たことになる。しかし、右の省略したAの部分に、『千年調』の刊行から赤貧の三年間を送ったと記されているから、年次の記載には矛盾が見られる。少なくとも一多が二十歳を過ぎる文化初年くらいまでは八幡にいたのではないだろうか。

『矢口丹波正日記』文政六年十一月四日の項には「可興死去」と記されている。前日に没した可興の死の報が、この日もたらされたのであろう。日記には事件に関わるものや近隣の人々の死亡の記録は綿密であるが、俳人についての記録はほとんど記されていないので、ただ一言の記載ながら、一多にとっての可興の存在の重さを感じられ

るのである。

二十を過ぎると一多は『神代講義』「1297」を書写するなど神主の勉強に努め、三十代前半は神主号の取得と神徳寺との権益をめぐる対立に日を送る。この間点取俳諧に遊ぶ心の余裕は無かったかみえる。しかし、三十四歳、父の死に際し、跡目願いの為上京した時の『道中日記帳』「文書135」は発句三章からはじまり、他にも発句や和歌が書き留められている。遊びにとどまらぬ表現としての俳諧への渴望を持ち、神職として寺社と抗争する中では心の慰めにもしていたのではないだろうか。そうした中、三十九歳で出会ったのが、俳諧と禅の境地を結びつけて論じる鶯笠（鳳朗）であった。

『矢口丹波正日記』文政九年の記載に、

十一月十八日 鶯笠先生来泊

同 廿三日 鶯笠先生、高サキ迄帰る

とある。おそらくこれが初めての出会いであったろう。六日間ゆったりと滞在した鶯笠に一多は心酔し、この後熱く指導を求めてゆくことになる。

## 二 春秋庵系の人々

雨仕が「松露庵」四世を継ぎ、可興が「松声庵」の号を譲られた鳥明（一七二六〜一八〇一）は、鳥酔門。宝暦十三年（一七六五）に師から松露庵を継承して三世となる。鳥明の松露庵は日本橋浮世小路にあった。安永九年（一七八〇）日本橋鉄砲町に春秋庵を興した白雄（一七三八〜一七九一）はその弟子であったが、不仲となって袂を分かち、天明三、四年には、鳥明と対立する形で、もともと松露庵俳諧の盛んな高崎など上毛地域を自己の勢力範囲に取り込んでゆく。雨仕もまた天明四年（一七八四）『春秋稿四編』に名前が見え、白雄と関わりを持つよう

になったことがわかるが、烏明から離れたわけではない<sup>(4)</sup>。

一方、一茶については、鳳朗との交友があったにもかかわらず、高崎近辺の人々との関わりは全く見られない。これについては、前引『上州の俳諧』に、

『寛政三年紀行』の旅以後、故郷へ落ちつくまでの二十年余の間に、上州の地を十三往復、都合二十六回も通っている。しかし、上州の俳人たちは故意に一茶を避けたものか、一茶の通行には全く関心を示さなかった。

と、述べている通りである。矢羽勝幸『信濃の一茶』（中公新書）によれば、一茶は文化八年（一八一二）頃には俳諧師番付の上位に名を連ね、それまでも徐々に知名度をあげていた。俳壇関係上の遠慮があったのか、独特の一茶調が受け入れられなかったか。ともあれ、一茶の心もひたすら故郷信州へ向いていたのであろう。

こうした中で、一多はどのような人々と交遊したのだろうか。矢口家所蔵の資料から追ってゆくことにしたい。

### 【短冊】

矢口家には、約百枚の短冊が所蔵されている。これらは短冊蒐集を趣味として所蔵されたものではなく、俳諧を介したつながりの中で自然と同家に残された交遊の記録である。

鳳朗はもちろんのこと、一多ら矢口家の人のものも含まれているが、これらについては別稿でふれることにし、それ以外の短冊から、伝記のわかるものを紹介することにした。

畢竟はわれをみがくや魂たまごころ奠

界香

矢口家に所蔵の短冊で最も古い部類のものである。福田界香（二七四二〜一八一四）は国府村（高崎市）の人。白雄門の金井袋路（大蔭）に学ぶ。金井大蔭が願主の天明三年（一七八三）『吾妻社奉納』「63」が矢口家に所蔵さ

れている。これに雨件も入集しているが、界香もまた雨件らと親交があったという。

冷じや恋わびあるく夜の猫

虎杖

語るべき隣は寝たり梅の月

虎杖

尋てもきく鶯の来鳴かな

天姥

結草虫は声のしほりをうごく也

天姥

ものしりの腹はしらねどぞらの月

八朗

宮本虎杖（一七四一〜一八二二）は信州戸倉の人。白雄から虎杖庵を認められたのは天明四年（一七八四）、以後白雄門の最古参として重きをなした。天姥は虎杖の別号。裏書きに七十一翁と記されているから、文化八年（一八一二）の揮毫である。矢口家には虎杖の書簡もあり、交流が深かったことが窺われる。八朗（一七九三〜一八四〇）は虎杖の長男で舟山とも号し、虎杖に学んだのちに白雄の内弟子となった倉田葛三に師事した。

水無月や露に息する裸むし

冥々

塩田冥々（一七四一〜一八二四）は陸奥国本宮（福島県）の養蚕業。天明五年（一七八五）刊『春秋稿五編』に名が見え、この頃白雄に入門した。

鹵朶葱そよぐばかりに清水哉

坐来

里見坐来は上毛の人で烏明門。生没年未詳。文政（一八一八〜三〇）頃没か。江戸で寄食生活をした後、松露庵五世を継ぐ。晩年は常陸国延方に移住した。



楨 たつや月を吹けすきそあらし 鷺白

黒岩鷺白（一七四六～一八二四）は上州草津温泉の人。高桑蘭更に入門する一方で白雄と交遊。白雄の一派とも親しく交わるとともに、一茶とも交遊があった。

月と花一度に山家見せぬいて 碩布

川村碩布（一七五〇～一八四三）は武蔵国馬場村（埼玉県毛呂山町）の名主の家に生まれる。白雄門で、葛三のあとを受けて文政元年（一八一八）頃春秋庵を継承し、三世を称した（正しくは五世）。一多との両吟が矢口家に残る都岐雄は、各地を行脚した後、天保初年（一八三〇）頃から碩布の執筆を務めた人である。

薄雪や先行道の際がたつ 其堂

生没年未詳。通称、松阪屋治良三良、江戸博労町に住んだ。白雄門。別号、婦童。其堂に改めたのは葛三のあとを受けて春秋庵を継いだ寛政十年（一七九八）〔俳人加舎白雄伝（後出）による〕と考えられるので、これ以降の揮毫。なお文化八年（一八一二）頃、其堂は春秋庵三世の座を放棄し、葛三が再任した。

臯月雨や竹を室のかくれ里 蕉雨

苔むしてどれも時代の山桜 蕉雨

桜井蕉雨（一七七五～一八二九）は信州飯田の豪商。俳諧に熱中する余り家産を傾け、文化十一年（一八一四）江戸に出て御家人となった。土朗門。鶯笠編『おぼろ物がたり』（文政三年（一八二〇）刊）に入集するなど、鳳朗との交流があったようで、その縁で一多とも交流の機会があったか。諸家の絵や発句・漢詩を集めた揮毫帖『書画

帖』(文政九年鶯笠序「826」)にも名がみえる。

軒孀の松もかげもつ後の月 阿兮

桜井阿兮(一七七一一一八四四)は下仁田の人。はじめ關更に、のち白雄門の大家・道彦に学んだ。

暁の山靄もたよりぞほとゝぎす 指鳳

鶯や田おこす人のたまに行 指鳳

茂木指鳳(一七七三一一八四五)は吾妻郡植栗村(群馬県)の人。名は善苗。勝手役に勤務した。

よし野にて花氣ちがひの直し<sup>①</sup>鳧 可布

凍りにていはほになるやさゞれ石 可布

元朝やありく見ゆる人の息 逸淵

久米逸淵(一七九〇一一八六一)、可布はその前号である。碩布門。武藏国八幡山(埼玉県本庄市)の人で、文政初年(一八〇四頃)から天保九年(一八三八)まで高崎で開庵。庵を西馬に譲って江戸に移る。一茶を柏原に訪ね、『おらが春』に序文を寄せる。文政七年(一八二四)、碩布から春秋庵を継承したが、天保の末(一八四三頃)返上した。鳳朗七回忌集や碩布追善集、東水追善集の編者であり、北関東の俳壇の中心的存在であったことが窺われる。

仕来足<sup>しきたり</sup>をからぬ小袖や水いはひ 葛古

小林葛古(一七九三一一八八〇)は信州八満(小諸市)の人。始め虎杖に、のち葛三に師事。天保十一年(一八四〇)

五月二十三日、鳳朗は葛古を訪ねた折のことを自著『続となみやま』（天保十一年（一八四〇）刊）に、「廿三日ハ葛古を訪ふ。兼てしも契りおきし事のあれば又なく歎び、何くれといとねもごころにす。将、家号を水篋屋と呼ぶ。」と記している。

こと、はれがほに居並ぶ小鴨かな 等栽

鳥越等栽（一八〇五〜一八九〇）は大阪の人、のち江戸に移る。梅室門。幕末から明治にかけての江戸三大家と称され、晩年花の本講社を興す。

水よりも高みにすむやなく水鶏 寄三

河田寄三（一八〇七〜一八七二）は、武蔵国中瀬（埼玉県深谷市から大里郡寄居町の辺り）の人。農業のかたわら逸淵に学び、江戸にも庵を構えた。

ひらけ行世にもならずほと、ぎす 茄言

中澤茄言（一八〇八〜一八七八）は伊勢崎の人。西馬門。家は参勤交代の本陣で手習宗匠として地域の教育に尽力した。

水鳥や言ばかすむですみだ川 一朗

永井一朗（一八二一〜一八七〇）は、伊香保温泉湯亭主人。逸淵門。一多の孫にあたる矢口正治氏の談（群馬県庶民教育寺子屋報告書）に「伊香保一朗、草津ノ竹烟と親交あり」とある。一多より三十四歳年下であるが、年

齡を超えた風交があったのであろう。

見るものも幅は出来けりほと、ぎす  
みき雄

三森幹雄（一八二九―一九一〇）は陸奥国中谷（福島県石川町）の人。春秋庵十一世。明治期、俳諧教導職となり、旧派の俳諧の指導者であった。

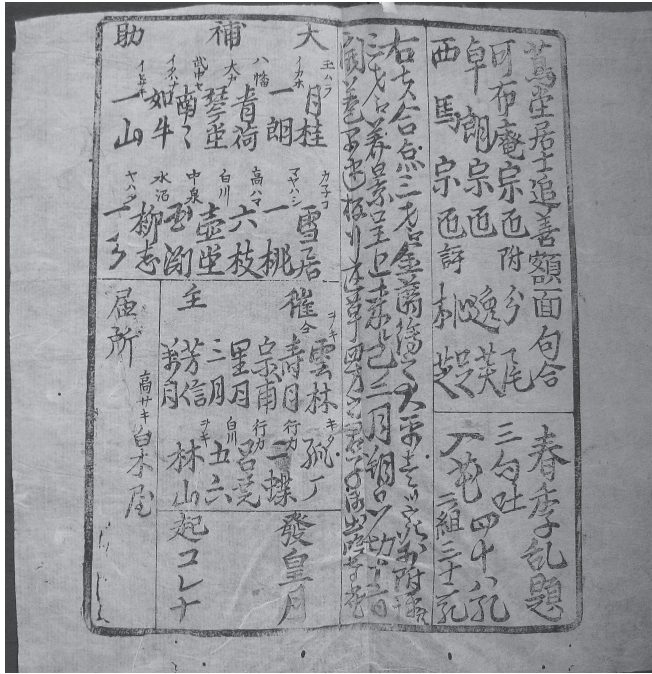
風さわぐ花にはなれて春の水  
為流

志倉為流（一八三八―一八八六）は高崎の人。別号、移流・有流。逸淵の親族で西馬の養子となる。逸淵門。西馬から惺庵を継承して二世となったが名のみで諸国を遊歴した。移流を為流と改めたのが西馬没後（『上毛古俳家全集』）とすれば、安政五年（一八五八）以降の染筆。

ことの葉の匂ひにはちて梅（の花）〈二字カスレて判読不能〉おのれもけふは顔のくれない  
橋守

和歌。詞書には一多が橋守をその居に尋ねた折に、一多の句に接して詠んだとある。関橋守せきのはしもり（一八〇三―一八八三）は榛名町室田の人。千種有功門。国学を学び皇朝学士とも号した。八幡八幡宮には、橋守の歌碑もある。

以上のように、一多と交遊のあったのは、主として、白雄―碩布―逸淵―西馬とつながる春秋庵に関わりのある人々であった。「涼風」という号がみられるのは、文化九年（一八一二）七月十二日朝五ツ時から暮七ツ時までに行つた白雄の伝書『俳諧寂葉』の書写が最後であるが、これも白雄系の人々との交流を表すものであろう。この年の五月、白雄が秘伝としてきた『俳諧寂葉』が門人拙堂によって刊行され、話題となっていたと考えられる。ちなみに



この夏、虎杖は白雄相伝の『俳諧寂菜』を息八朗に筆写させ、門人葛古に与えている。

【募句廣告】

写真は、「萬堂居士追善額面句合」の投句募集のチラシである。大補助として一多も名を連ねている。入花料（投句料）が三句で四十八孔（文）で、中央に「右者各台点三才江金蔭絵之大平壹ツ宛、外附評三才江美景呈上。来ル巳ノ二月朔日メ切、十二日開巻早速板行返草、四方之君子御出吟奉希候」とあるように、高点をとった際には豪華な景品が用意されていた。

萬堂は、勢多郡三原田（群馬県渋川市）の人。

逸淵門で弘化元年（一八四四）に没しているの、この「巳ノ二月」が弘化二年のこととわかる。可布の門人であるから、やはり白雄の系統である。富処（のち志倉）西馬（一八〇八〜一八五八）は高崎の人で逸淵門。江戸に出て惺庵を開いた。このように、三人ともに、上州にゆかりはあるが江戸住の宗匠である。

附評の青木分尾（一八〇〇〜一八五七 勢多郡川原村の人）、関根逸美（一八〇八〜一八七一 高崎の人）、高井

心足（一七九三〜一八六五 高崎の人）、横山木芝（一八一八〜一八七三 高崎の人）の四人はいずれも逸淵に俳諧を学んだ。木芝はもと秩父の人だが、高崎に来て薬種商白木屋を営んだ。「屈所」として「高サキ 白木屋」とあることから、薬種商である木芝の店が取り次ぎを行っていたことがわかる。

一多の逸淵門の点取俳諧への参加を示すとともに、その具体像を伝える好資料である。

### 三 和算家

一多が神職を務めた八幡八幡宮には、近世の算額が三枚奉納されている。文化七年（一八一〇）板鼻（安中市）の小野栄重によるもの。天保五年（一八三四）剣崎村（高崎市）に生まれ、新井村（安中市）に住んだ岩井重遠によるもの。安政七年（一八六〇）下里見村（高崎市）の中曾根宗那の門人たちによるものである。

関孝和を生んだ上州は、和算の盛んな土地柄であった。矢口丹波記念文庫にも五五点の和算書がある。これらはほとんどが一多の父正喜の書写したもので、矢口家系図稿の八代正喜のところには「算術ヲ好。板鼻小野良佐（栄重）友人タリ」と記されている。

一方一多は、父ほどには和算に傾倒しなかったものようである。しかし和算書を書写することはあったらしく、中曾根宗那蔵書約三百冊の和算書の中に弘化二年（一八四五）から同四年の間に一多の写した稿本が三十冊ほどあり、宗那の孫慎平翁の談として<sup>5)</sup>、

これらの写本は八幡八幡宮の神主であった「丹波さま」に頼んで書いて貰ったのだという。「丹波さま」は字を書くのが早くて、一冊の和算書を一晩で写したとのことであった。

と云う。

一多と岩井重遠（一八〇四〜一八七八）との交遊を示す資料がある。岩井が、江戸の和算家馬場正統（一八〇一〜

一八六〇）に宛て、一多の入門を依頼した紹介状である。しかし和算の、ではない。俳諧の入門依頼である。馬場正統は幕臣であったが、俳号を錦江と称し、葛飾派の宗匠として其日庵九世を継いだ。俳諧関係の著作も多く、特に『俳諧七部集通旨』『奥細道通解』『風俗文選通釈』など、蕉門の代表的な作品の通釈で知られている。封書の宛先に「江戸四ツ谷南寺町馬場金之丞様御屋敷内 馬場小太郎様」とあるので、錦江の父正督が没した天保十四年（一八四三）以前に書かれたことがわかる。天保十四年は、一多が鳳朗と二条家俳諧に連なつた年である。

この紹介状が矢口家に残されているのは、書いてはもらつたものの実際には使われなかつたからであろう。鳳朗との関係が密になつてゆく中で、不要になつたものかもしれない。しかし一多が、江戸の俳諧宗匠に興味を持ち、入門を考えたことがあつたということは興味深い。実直な一多のこと、多くの注釈を行つた錦江のもつ学識に心惹かれたものであるが、その入門依頼は、江戸との距離（実際の里程だけではなく文化的な意味でも）の近さを思わせる。江戸に対抗する意味での上州という地域、という意識が果たしてあつたかについては、今後の課題として考えてゆきたい。

次に翻字を示す。幕臣の馬場錦江に対し、非常に遠慮がちに紹介していることが読み取れる。書簡の写真は末尾に示した。（読み下しは、読みやすいよう現代仮名遣いとした。）

稚冷之節ニ御坐候得共

秋冷の節にごさ候えども

其御地御全家御揃

その御地御全家おそろい

益々御機嫌能被遊御坐

ますますご機嫌よくござあそばされ

欣候。一之御叟ニ奉恐寿候。

欣び候。一の御事に恐寿奉り候。

陳者小子近友碓氷郡八幡村之仁

のぶれば小子近友、碓氷郡八幡の仁

矢口丹波俳諧執心ニ而

御前様の御門人ニ成度旨

頼度申聞候へ共、等閑致置候。

然処又候、是非相願度、數

申出候間無據申上候。何卒

可相成候ハ、御許容被成

下、願之通御聞濟被下

置候ハ、難有仕合奉存候。

且又百韻御点被成下

度奉願上候。右為御挨拶

御肴代金百匹差上候間、御受

納被下置度奉願候。御添削

被下置候ハ、此仁ニ御投之

被下候様、奉願候。右申上候処

宜敷御聞濟被下度、奉願候。

其外期珍喜之節候。

恐惶謹言

八月十九日認 岩井右内重遠

矢口丹波、俳諧執心にて

御前様の御門人になりたきむね

頼みたく申し聞こえ候えども、なおざりに致し置き候。

しかるところまたぞろ、是非あい願いたく、かず

申し出候あいだ、よんどころなく申し上げ候。なにとぞ

あいなるべく候わば、御許容なし

下され、願いのとおりに御聞き済み下し

置かれ候わば、有難きしあわせに存じ奉り候。

且また、百韻御点なし下され

たく願い上げ奉り候。右、御あいさつの為

御肴代金百匹差し上げ候間、御受

納下し置かれたく願い奉り候。御添削

下し置かれ候わば此の仁に之をお投げ

下され候よう、願い奉り候。右申し上げ候ところ

よろしく御聞き済み下されたく、願い奉り候。

その外珍喜の節を期し候。

恐惶謹言



馬小太郎様

御家中様

二白申上候。御一統中様<sup>江</sup>も

可然御伝達奉願上候。呉々

も丹波義御門人<sup>ニ</sup>被成下度

奉願上候。夫共御許容相

成兼候ハ、強而御願申上候

義<sup>ニ</sup>者、無御坐候。

一、百韻の義者御添削被下

置、是非此仁<sup>ニ</sup>御渡被下候様

奉願上候。以上

二白申し上げ候。ご一統中様へも

しかるべく御伝達願い上げ奉り候。くれぐれ

も丹波義、御門人になし下されたく

願い上げ奉り候。それとも御許容あい

成りかね候わば、強いて御願い申し上げ候

義には、ござ無く候。

一、百韻の義は、御添削下し

置かれ、是非此の仁に御渡し下され候よう

願い上げ奉り候。以上

### まとめ

矢口家には他にも、梅室・卓郎らの句稿や連句の巻など、一多の交遊を示す資料がある。しかし本稿に紹介した  
ものでも、俳諧に関わる交遊のあらましを十分に窺い知ることができよう。

今となつては無名の人たちながら、彼らは熱心に句作し、逆境の時にはそれに慰められ、あるいはゲームとして  
楽しんで温かく交流した。家産を傾けるほどに熱中する者に限らず、俳諧に対する人々の熱意には驚きを禁じ得な  
い。何故それほどまでに俳諧は我々の祖先に愛されたのだらうと、あまりにも基本的な疑問さえふつふつとわいて

くるほどである。

一シの残した句の書留も膨大な数にのぼる。次には具体的な作品を読み解くことで、この疑問への答えを追ってゆくことにしたい。

## 注

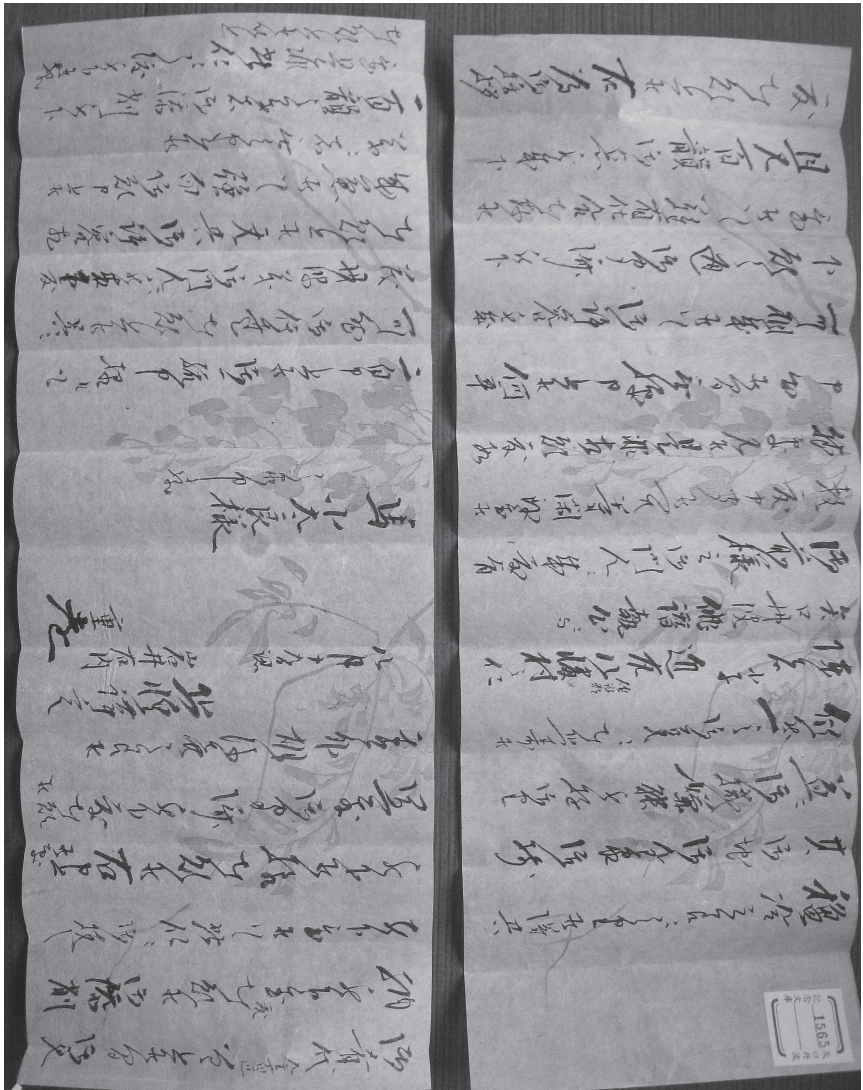
- (1) 明治五年正月書『四時随筆控』「92」に一シが書き留めた自身の文久二年の稿。
- (2) 書名のあとの数字は、矢口丹波記念文庫の蔵書番号。以下同じ。
- (3) 前稿において、可興が高遠より来た人で坐来より庵号をもらったとしたことは誤りで訂正したい。
- (4) 『春秋稿五編』には名前が見えないので、白雄の影響は限定的だったのではないだろうか。
- (5) 大竹茂雄「矢口家の和算書について」(『群馬和算研究会会報』十五 昭和四五年十一月)の記述。紅林健志「高崎矢口家における筆写活動―写本の奥書を中心に―」(『調査研究報告』三四 平成二六年三月)の引用による。

俳人の伝記は、『俳文学大辞典』(平成七年十月 角川書店)・『上毛古俳家全集』(既出)・『上州の俳諧』(既出)・『上毛の俳諧』(田村夙夢著・平成元年十月 上毎印刷工業株式会社)・『上毛文雅人名録』(既出)・『新撰俳諧年表』(平林鳳二・大西一外編・大正十二年 書画珍本雑誌社)をもとにまとめ、白雄については矢羽勝幸著『俳人加舎白雄傳』(平成十三年三月 郷土出版社)を参考にした。

短冊・書簡の読みをご教示いただいた諸氏に深謝申し上げます。

【附記】 本稿は平成二十八年年度科学研究費補助金による研究課題「近世後期俳諧と地域文化」(課題番号…

16K02435)の成果の一部である。



# A Study on Human Relations regarding Yaguchi Issan, a Teacher of Haikai in Gumma: The Members of the Syunzyū-an Group and Japanese Mathematicians

KANATA Fusako

**Abstract** Yaguchi Issan (1787–1873) served as the Shintō priest of Yawahachiman-gū shrine (八幡八幡宮) in Takasaki-city, Gumma Prefecture, and was devoted to enlightening activities in his area as a teacher of haikai (俳諧) and terakoya (寺子屋). Particularly engaged in haikai, at the beginning of his career, he interacted with Heika-an (平花庵) group in his hometown Takasaki. Later he became an ardent pupil of Hōrō (鳳朗), who was one of the three great haiku poets in the Tempō period. He himself also taught neighbors haiku in his later years.

Most of the records of his cultural activities are preserved in his descendant's house, "The Memorial Library of Yaguchi Tamba (矢口丹波記念文庫)". I once compiled these biographical materials and wrote a paper titled "A Biographical Sketch of Yaguchi Issan: Based on the Book Collection of the Yaguchi Family in Yawata, Gumma Prefecture" (THE BULLETIN OF THE NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE vol. 39 2013・3). In order to know what types of people he interacted with in his cultural activities, I referred to materials of the library such as tanzakus (短冊: a strip of paper for writing waka or haiku), letters, and advertisements for haiku contests. Throughout the process of analyzing the persons depicted in the materials, the details of Issan's haikai activity are revealed.

The Yaguchi family's collection consists of about a hundred tanzakus. After analyzing each writer, this paper describes twenty of them particularly the ones whose biographical records are identifiable. In light of this, it can be assumed that Issan interacted mainly with the Haikai group of Syunzyū-an which had connections with Shirao (白雄)—Sekihu (碩布)—Itsuen (逸淵)—Saiba (西馬). The advertisement for a haiku contest shows that he also used to write tentori-haikai in his later years (tentori-haikai is a type of haikai competition that nominates three most excellent contestants).

Furthermore, there is a letter that suggests Issan's relationship with Japanese mathematicians. It was written as a letter of introduction sent from the Gumma Prefecture mathematician Iwai Shigetō (岩井重遠) to Baba Seitō (馬場正統), a mathe-

matician in Edo. Baba, under his pseudonym 'Kinkō (錦江)', was famous as a teacher of haikai.

This paper examines the activities of the local teachers of haikai as a clue to clarify the cultural activities of the northern Kanto villages in the late Edo Period. Moreover, referring to the preserved materials, it further focuses on the interactions within the haikai community.

**Keywords:** Haikai, Takasaki (Jyōsyū), Japanese Mathematicians.